

# 日本語における漢字の発音の歴史

田中 健彦\*

## 1. まえがき

日本では、太平洋戦争終結後現代仮名遣いが用いられている。一方、それまでに用いられていた、漢字のいわゆる歴史的仮名遣いは、奈良時代またはそれ以前に日本に導入された漢字の発音が元になっている。ただし、中国語には音節の末尾が子音で終わるものがあるが、日本語の音節は、基本的に「子音＋母音」で構成されていること、また当時の漢字の発音に該当する音がない場合があったことから、歴史的仮名遣いと漢字の発音にはかなりのずれがあった。ここでは、中国の隋・唐時代の漢字の発音と、同時期に相当する日本の奈良時代の仮名遣いに加えて、中国語および朝鮮語の現代音を参考にしながら、日本語における漢字の発音の歴史を考察し、現代仮名遣いにおける同音異義語の発生についても述べる。

## 2. 「てふてふ」とは？

日本では、戦前(太平洋戦争終結前)歴史的仮名遣いが用いられ、「ちょうちょう(蝶々)」は「てふてふ」と書いていた。そう書いていた理由は、昔、蝶々を「てふてふ」と発音していたからである。さらに「蝶」を含め種々の漢字が導入されたころ(万葉仮名ができる以前)、「は行」は、今でいう「ば行」の発音をしていた<sup>1)</sup>。ということは、当時蝶々を *teptep* (*teputepu*)<sup>2)</sup> と発音していたことになる。

<sup>1)</sup>したがって、当時「母」は *papa* と、また「光」は *pikari* と発音していた。

<sup>2)</sup>原音は *teptep* であるが、日本語の音節は「子音＋母音」で構成されているので *teputepu* と発音していたはずである。ただし、奈良時代には、[p]音が[ɸ]音に変化していたと言われている。[ɸ]音は、両唇摩擦音で、現在の日本語の[フ]の子音部と同じ音である。ハ行音の変遷については、中央公論社 小松英雄著「日本語の世界 7 日本語の音韻」1981年による。

さて、中国から漢字が輸入されたのは、奈良時代よりもっと前であるが、中国と朝鮮とは地続きで、日本は朝鮮半島と地理的に近いことから、朝鮮からの渡来人によって日本に漢字がもたらされた。そこで因みに手元の日韓辞典を調べて見ると、現代朝鮮語では蝶を *chop*<sup>3)</sup>と発音していることが分かった。歴史的仮名遣い(由来は万葉仮名)が「てふ」となっている漢字には、「蝶」以外に「諜」、「牒」、「帖」および「貼」があり、「でふ」<sup>4)</sup>となっている漢字には「帖」(仮名遣いは「てふ」と「でふ」との2種類ある)および「豊」である。これらの漢字の現代の朝鮮語の発音はすべて *chop* である。

<sup>3)</sup>これは、ローマ字による近似的表記である。正確な発音については、下記表 1 の朝鮮語現代音の[ ]内の発音記号を参照。

<sup>4)</sup>奈良時代「でふ」は、「てふ」と表記されていた。濁点の使用が定着したのは室町時代末期ごろから(小学館「国

語大辞典」1982 年による)であり、奈良時代にはまだ濁点が制定されていなかったため、その当時中国から伝わった漢字音が「でふ」に近いものであったとしても、「てふ」とつづるしかなかったわけである。本書の以下の表の「歴史的仮名遣い(奈良時代)」の欄は、このことに注意して参照していただきたい。

一方、手元の漢和辞典によれば、これら歴史的仮名遣いで「てふ」または「でふ」と表記していた漢字の中古音(隋・唐時代)は、すべて **tep** または **dep**<sup>5)</sup>である。これらの漢字の中国語<sup>6)</sup>現代音(拼音)は、**die** または **tie** である。

<sup>5)</sup>これは、ローマ字による近似的表記である。正確な発音については、下記表 1 の中国語中古音の[ ]内の発音記号を参照。

<sup>6)</sup>現在の中国の標準語。北京語が元になっている。ただし拼音は、ローマ字によるつづり字であって、直接発音を示すものではない。たとえば拼音の **qi** の発音は[**tɕʰi**]。

これらの関係を表にまとめると次の表 1 のようになる。

表 1 [チョー]または[ジョー]と発音する漢字と中国語中古音との関係

漢字	現代仮名遣い	歴史的仮名遣い(奈良時代) <sup>7)</sup>	中国語中古音 <sup>8)</sup>	朝鮮語現代音 <sup>9)</sup>	中国語現代音(拼音) <sup>8)</sup>
蝶	ちょう	てふ(h)	[dep]	chop [tʃɔp]	die [tiɛ]
諜				chop [tʃɔp]	
牒			[tep]		tie [t'ie]
貼					
帖	ちょう、じょう	てふ(w)(h)、でふ(t)	[tep]		
晷	じょう	でふ(h)	[dep]		die [tiɛ]

<sup>7)</sup>呉音を(w)で、漢音を(h)で、慣用音を(t)で示す。呉音とは、江南の南朝式発音、漢音とは、唐代の長安語の発音、そして慣用音とは、習慣的に原音と少し異なった音になっているものを言う。中国では 598 年に南北朝が統一されて、隋が建国され、618 年に唐が建国された。すなわち、日本にはまず呉音、そのあと漢音が導入された。なお奈良時代は、710 年から 794 年である。呉音、漢音および慣用音の区別は、学習研究社藤堂明保編「学研大漢和辞典」1998 年版による。

<sup>8)</sup>中古音として隋・唐の時代の発音を発音記号で記す。発音記号は、上記「学研大漢和辞典」による。ただし、現代音の発音記号は、国際音声記号(IPA)による

<sup>9)</sup>[ ]外は、ローマ字による近似表記で、[ ]内は発音記号である。発音記号は、NHK ラジオハンゲル講座テキスト 1988 年 4 月号による。

この表から、歴史的仮名遣いで「てふ」または「でふ」と表記されていた漢字は、現代日本語ではすべて[チョー]または[ジョー]と発音され、現代中国語では[**tie**]または[**t'ie**]と発音されて、末尾の子音 **p** が消えていること、一方、現代朝鮮語では、末尾の子音 **p** を保存していることが分かる。

### 3. 発音が m または n で終わる漢字

日本が漢字を輸入した当時、発音が m または n で終わる漢字の読みを仮名で区別する方法がなく、両方とも「む」で表していた。「む」は万葉仮名の「无」から来たもので「无」は「無」の異体字である。発音が m または n で終わる漢字は多数あるが、表 2 から分かるように現代日本語および現代中国語では m がすべて n に変化しており、現代朝鮮語のみが m と n との区別を保存している。

表 2 発音が m または n で終わる漢字

漢字	現代仮名遣い	歴史的仮名遣い(奈良時代)	中国語中古音	朝鮮語現代音	中国語現代音(拼音)	現代朝鮮語の例
三	さん	さむ(w)(h)	sam [sam]	sam [sam]	san	三星(samsung)
金	きん	きむ(h)	kim [kiəm]	kim [kim]	jin	金日成(kim ilsung)
今	こん	こむ(w)	kim [kiəm]	kum [kum]	jin	長今(chang gum) <sup>10)</sup>
南	なん	なむ(w)	nam [nəm]	nam [nam]	nan	湖南(ho'nam)
感	かん	かむ(h)	kam [kəm]	kam [kam]	kan	感謝(kamsa)
山	さん	さむ <sup>11)</sup> (h)	san [sɔn]	san [san]	shan	南山(namsan)
緊	きん	きむ <sup>11)</sup> (w)(h)	kin [kiɛn]	kin [kin]	jin	緊急(kin'gup)
困	こん	こむ <sup>11)</sup> (w)(h)	kun [k'uən]	kon [kon]	kun	困苦(kon'go)
難	なん	なむ <sup>11)</sup> (w)	nan [nan]	nan [nan]	nan	苦難(ko'nan)
幹	かん	かむ <sup>11)</sup> (w)(h)	kan [kan]	kan [kan]	gan	幹事(kansa)

<sup>10)</sup>朝鮮語では 2 音節目の k は、g に変化する。

<sup>11)</sup>室町時代に平仮名の「ん」が、「无」の草書体として作られ、それ以降これら 5 つの音は、「かん」、「きん」、「こん」、「なん」および「かん」と表記されるようになった。それまでは漢字の発音の末尾が[m]であっても[n]であっても区別せずに「む」で表記していた。

### 4. 発音が ng で終わる漢字

漢字には、発音が ng で終わるものが多い。ある中国語の学習書に、“日本の漢字の読みで「ん」で終わるものは、中国語の発音が ng で終わるものが多い”と記されている。なぜこうなったかという、漢字が日本に輸入された当時、日本には ng に相当する発音がなかったため、やむを得ず ng に「う」を当てたのである<sup>12)</sup>。その例は、「王(wang→わう)」、「中(chung→ちゆう)」、「長(ちやう→chang)」、「動(dong→どう)」等枚挙にいとまがないが、一方、当時発音が ng で終わらない漢字の末尾にも「う」を当てたものがある。その例には「調(teu→てう)」、「道(dau→だう)」、「校(kau→かう)」等がある。これらをまとめると表 3 のようになる。

<sup>12)</sup>徳間ブックス 藤堂明保著「漢字の知恵 —その生い立ちと日本語—」1967 年による。

表3 歴史的仮名遣いが「う」で終わる漢字

漢字	現代仮名遣い	歴史的仮名遣い	中国語 中古音	朝鮮語 現代音	中国語 現代音	現代朝鮮語の例
王	おう	わう(w) (h)	wang [ɦɪwɑŋ]	wang [wɑŋ]	wang	国王(kuk'wang)
中	ちゅう	ちゆう(w) (h) <sup>13)</sup>	chung [tɕuŋ]	chung [tɕuŋ]	zhong	中心(chungsim)
長	ちよう	ちやう(h)	chang [tʃɑŋ]	chang [tʃɑŋ]	zhang	長身(changsin)
動	どう	どう(t)	dong [duŋ]	dong [tuŋ]	dong	移動(idong)
調	ちよう	てう(h)	teu [deu]	cho [tʃo]	tiao	調査(chosa)
道	どう	だう(w)	dau [dau]	to [to]	dao	鉄道(choldo)
校	こう	かう(h)	kau [ɦɑu]	kyo [kjo]	xiao	校舎(kyosa)

<sup>13)</sup>歴史的仮名遣いでは、拗音に用いる「ゃ」、「ゅ」および「ょ」は、他の字と同じ大きさであったが、現代仮名遣いでは「ゃ」、「ゅ」および「ょ」のように他の字よりも小さく書くようになった。したがって、歴史的仮名遣いでは、「病院」も「美容院」も「びよういん」であって、区別ができなかった。

## 5. 発音が h で始まる漢字

上記のように、漢字の導入当時、その発音にどの仮名を当てるかに苦勞したことがうかがえるが、発音が h で始まる漢字もそれに属する。すなわち、当時日本語には、現代日本語の「は」行の音がなかった。そこで、やむを得ず、これに似ているものとして「か」行の音を当てたのである。というのは、当時「は」行は、p で始まる音として発音されていたからである。このように発音が k または h で始まる漢字すべてに「か」行の音を当てたために、日本語では発音が k で始まる漢語が極めて多い。たとえば、アルファベット順ローマ字引きの和英辞典を眺めて見ると、k で始まることばのページ数が、他のページに加えて圧倒的に多いことが分かるだろう(<補足2>参照)。発音が k または h で始まる漢字の例を挙げると表4のようになる。この表から、現代朝鮮語でも k 音と h 音とを区別していることがわかる。

表4 発音が h で始まる漢字

漢字	現代仮名遣い	歴史的仮名遣い	中国語 中古音	朝鮮語 現代音	中国語 現代音
海	かい	かい(w) (h)	hai [ɦai]	hae [ɦe]	hai [xai]
韓	かん	かん(h)	han [ɦan]	han [han]	han [xan]
航	こう	かう(h)	hang [ɦɑŋ]	hang [haŋ]	hang [xɑŋ]
好	こう	かう(w) (h)	hau [ɦau]	ho [ho]	hao [xau]
開	かい	かい(w) (h)	kai [k'ɔi]	kae [ke]	kai [k'ar]
幹	かん	かん(w) (h)	kan [kan]	kan [kan]	gan [kan]
康	こう	かう(w) (h)	kang [k'ɑŋ]	kang [kaŋ]	kang [kaŋ]
溝	こう	こう(h)	kou [kəu]	ku [ku]	gou [kou]

## 6. 発音が p、t または k で終わる漢字

中古音が p で終わる漢字については、上記2.の「蝶」を初めとしていくつか例を挙げた。ここで、中古音が p で終わるその他の漢字、および t または k で終わる漢字について、現代の日本語、中国語および朝鮮語の発音がどのような変遷を示しているか調べてみると表5のようになる。

表5 発音が p、t または k で終わる漢字

漢字	現代仮名遣い	歴史的仮名遣い(奈良時代)	中国語中古音	朝鮮語現代音	中国語現代音
十	じゅう	じふ(w)	zip□[ʒiəp]	sip□[sip]	shi [ʃɿ]
集	しゅう	しふ(h)	dzip□[dziəp]	chip□[tʃip]	ji [tʃei]
甲	こう	かふ(h)	kap□[kǎp]	kap□[kap]	jia [tʃeia]
業	ぎょう	げふ(h)	Gyap [ŋiʌp]	op□[ɔp]	ye [ie]
塔	とう	たふ(w) (h)	tap□[tʰap]	tap□[tʰap]	ta [tʰa]
一	いち	いち(w)	yet□[iēt]	il□[il]	yi [i]
八	はち	はち(w)	puat□[puat]	pal□[pʰal]	ba [pa]
日	にち	にち(w)	niet□[niēt]	il□[il]	ri [ʒɿ]
出	しゅつ	しゅつ(h)	chuet□[tʃʰuēt]	chul□[tʃʰul]	chu [tʃu]
発	はつ	はつ(h)	pyuat□[piuat]	pal□[pal]	fa [fa]
駅	えき	えき(h)	yiek□[yiek]	yok□[jɔk]	yi [i]
式	しき	しき(w)	shik□[ʃiək]	sik□[sik]	shi [ʃɿ]
学	がく	がく(w)	hok□[hɔk]	hak□[hak]	xue [ɣue]
国	こく	こく(w) (h)	kuk□[kuək]	kuk□[kuk]	guo [kuo]
育	いく	いく(w) (h)	yuk□[yiuk]	yuk□[juk]	yu [y]

この表から分かるように発音が p で終わる漢字には歴史的仮名遣いとして末尾に「ふ(上述のように漢字導入時の発音は pu)」を、t で終わる漢字には「ち」または「つ」を、そして k で終わる漢字には「き」または「く」を当てていることが分かる。また中国語現代音では、これら p、t および k がすべて消滅しており、朝鮮語現代音では、p および k が保存され、t 音は l(ル)音に変化していることが分かる。

## 7. 日本語の発音の単純化

日本では、太平洋戦争終結前までは歴史的仮名遣いが用いられてきたが、戦後現代仮名遣いが制定されるに至った。これは、歴史的仮名遣いが、昔中国から漢字を導入したときの発音を書いたものであるのに対して、その実際の発音が大きく変化してきているので、仮名遣いを現代の発

音に合わせた方が学校教育上も好ましいと考えたからである。表 6 に、現代仮名遣い、歴史的仮名遣いおよびその漢字の音読みの例についていくつか挙げてみた。

表 6 歴史的仮名遣いと漢字の読みの例

現代 仮名 遣いで 用いる 仮名	歴史的 仮名遣 いで用 いる仮 名	例
え	え	栄誉(えいよ) 営業(えいげふ) 英雄(えいゆう) 延期(えんき)
	ゑ	声(こゑ) 植ゑる(うゑる) 絵(ゑ) 円(ゑん) 知恵(ちゑ)
お	お	奥(おく) 雑音(ぞつおん)
	を	十日(とをか) 悪寒(をかん)
か	か	蚊(か) 紙(かみ) 静か(しずか) 家庭(かてい) 休暇(きゅうか)
	くわ	火事(くわじ) 結果(けつくわ <sup>14)</sup> ) 生活(せいくわつ)
かん	かん	簡単(かんたん) 感情(かんじやう) 期間(きかん) 印鑑(いんかん)
	くわん	関東(くわんとう) 歓迎(くわんげい) 習慣(しふくわん)
ゆう	ゆう	勇氣(ゆうき) 英雄(えいゆう) 金融(きんゆう)
	ゆふ	夕刊(ゆふかん)
	いう	遊戯(いうぎ) 郵便(いうびん) 勧誘(くわんいう) 有限(いうげん)
	いふ	都邑(といふ)
こう	こう	功績(こうせき) 拘束(こうそく) 公平(こうへい) 気候(きこう)
	こふ	劫(こふ)
	かう	講義(かうぎ) 健康(けんかう) 校舎(かうしゃ) 高速(かうそく)
	かふ	甲乙(かふおつ) 太閤(たいかふ)
ほう	ほう	奉祝(ほうしゆく) 俸給(ほうきふ) 豊年(ほうねん) 霊峰(れいほう)
	ほふ	法会(ほふえ)
	はう	包囲(はうゐ) 芳香(はうかう) 砲台(はうだい)
	はふ	法律(はふりつ)
よう	よう	用事(ようじ) 容易(ようい) 中庸(ちゅうよう)
	やう	八日(やうか) 様子(やうす) 大洋(たいやう) 太陽(たいやう)
	えう	幼年(えうねん) 要領(えうりやう) 童謡(どうえう) 日曜(にちえう)
	えふ	紅葉(こうえふ)
じゅう	じゅう	充実(じゅうじつ) 従順(じゅうじゆん) 臨終(りんじゅう)
	じう	柔軟(じうなん) 野獣(やじう) 柔道(じうだう)

	じふ	十月(じふぐわつ) 渋滞(じふたい) 墨汁(ぼくじふ)
	ぢゆう	住居(ぢゆうきよ) 重役(ぢゆうやく) 世界中(せかいぢゆう)
きょう	きょう	共通(きょうつう) 恐怖(きょうふ) 興味(きょうみ) 吉凶(きつきょう)
	きやう	兄弟(きやうだい) 鏡台(きやうだい) 経文(きやうもん)
	けう	教育(けういく) 矯正(けうせい) 絶叫(ぜつけう) 鉄橋(てつけう)
	けふ	今日(けふ) 脅威(けふゐ) 協会(けふくわい) 海峡(かいけふ)
じょう	じょう	冗談(じょうだん) 乗馬(じょうば) 過剰(くわじょう)
	じやう	成就(じやうじゆ) 上手(じやうず) 状態(じやうたい) 感情(かんじやう)
	ぜう	饒舌(ぜうぜつ)
	ぢやう	定石(ぢやうせき) 丈夫(ぢやうぶ) 市場(しぢやう) 令嬢(れいぢやう)
	でう	箇条(かでう)
	でふ	一帖(いちでふ) 六畳(ろくでふ)
ちょう	ちょう	徴収(ちょうしう) 清澄(せいちょう) 尊重(そんちょう)
	ちやう	腸(ちやう) 町会(ちやうかい) 聴取(ちやうしゆ) 長短(ちやうたん)
	てう	調子(てうし) 朝食(てうしよく) 前兆(ぜんてう) 野鳥(やてう)
	てふ	蝶(てふ) 防諜(ばうてふ)
ぴょう	ぴょう	結氷(けつぴょう) 信憑性(しんぴょうせい)
	ぴやう	論評(ろんぴやう)
	ぺう	一票(いつぺう) 本表(ほんぺう)
りょう	りょう	丘陵(きうりょう)
	りやう	領土(りやうど) 両方(りやうほう) 善良(ぜんりやう) 納涼(なふりやう)
	れう	寮(れう) 料理(れうり) 官僚(かんれう) 終了(しゆうれう)
	れふ	漁師(れふし) 狩猟(しゆれふ)

<sup>14)</sup>歴史的仮名遣いでは、促音を表す「つ」は、他の字と同じ大きさであった。

## 8. 同音異義

上記表 6 から、日本語古来の複雑な音韻体系は、時代を経るに連れ、単純化へ向かったこと、また漢字の h 音と k 音とを文字上(したがって発音上) 区別できなかったこと、さらに ng の発音を示す仮名に「う」を当てたことから、日本語では世界の他の言語に類を見ないほど多数の同音異義語を生み出すこととなった。現在のように漢字仮名混じり文を採用しているかぎり、文書を読む上では、差し支えないが、放送や演説など音声で情報や意見を伝える場合、同音異義語のことを念頭において誤解を招くことのない草稿を作成する必要がある。過去の一時期には、日本語のローマ字表記やカタカナ表記を正規の表記方法としようという意見が出たことがあったが、それらが実現しなかった理由のひとつにこの同音異義語の問題があった。

同音異義語が多く含まれる文として、よく人の口の端にのぼるのが「貴社の記者が汽車で帰社

した」である。これら4つの「きしゃ」は朝鮮語および中国語の漢字の発音ではどのように区別されているのかをまとめると、表7のようになる。

表7 [キシヤ]と発音される漢字の熟語の例

漢字語	現代仮名遣い	歴史的仮名遣い	朝鮮語現代音	中国語現代音
貴社	きしゃ	くみしゃ	kwisa □ [kwisa]	guǐshè
婦社				guīshè
汽車		きしゃ	kich'a □ [kitʰa]	qìchē
記者				kicha □ [kitʃa]
発音の区別	1種類	2種類	3種類	4種類

次に同音異義語の数の多いものの例として「きかん」を挙げると表8のようになる。

表8 [キカン]と発音される漢字の熟語の例

番号	漢字語	現代仮名遣い	歴史的仮名遣い	朝鮮語現代音	中国語現代音	
1	季刊	きかん (0) <sup>15)</sup>	きかん	kyekan [kjekan]	jìkān	
2	既刊			kigan [kigan]		
3	基幹				jīgàn	
4	期間	qíjiān				
5	旗艦	きかん (2) (0)		kiham [kiham]	qíjiàn	
6	気管	きかん (0) (2)	きくわん	kikwan [kikwan]	qìguǎn	
7	器官	きかん (2)			qìguān	
8	奇観	きかん (0)			qíguān	
9	機関	きかん (2)			jíguān	
10	帰還	きかん (0)			kwihwan [kwihwan]	guīhuán
11	帰館				kwikwan [kwikwan]	guīguǎn
	発音の区別	1種類 (2種類) <sup>16)</sup>	2種類 (4種類) <sup>16)</sup>	6種類	10種類	

<sup>15)</sup>(0)は、標準語について、三拍の語でアクセントが「低高高」のものを、また(2)は「低高低」のものを示す(三省堂「新明解国語辞典」による)。

<sup>16)</sup>アクセントを考慮した場合。

この表から現代日本語では、現代仮名遣いが「きかん」の11語の漢字の発音は、アクセント(標準語における)を考慮しなければ1種類に、考慮すれば2種類に、分けられることが分かる。現代朝鮮語では、6種類の発音に分かれ、現代中国語では10種類に分かれる。



## 9. まとめ

以上のことから次のことが言える：

- (1) 日本語では、中国から漢字を導入した際、その発音をできるだけ忠実に仮名で表してきたが、時代の変遷を経て発音が極めて単純化されている。
- (2) 一方、朝鮮語では、現代の発音をみるかぎり、漢字導入当時の発音をほぼそのまま踏襲していると考えられる。
- (3) 中国語(北京語)では、日本が漢字を導入した当時と比較すると、発音が大きく変化し、語末の p, t および k はすべて消滅している。
- (4) 現代日本語に同音異義語が多い原因は次のとおりである。
  - 1) 漢字導入当時、語頭の h の発音をすべて k で表したこと。
  - 2) 漢字導入当時、語末の m および n を区別せず「む」で表したこと。
  - 3) 漢字導入当時、語末の ng を「う」で表したこと。
  - 4) たとえば、漢字導入当時、「じよう」、「じやう」、「ぜう」、「ぢやう」、「でう」および「でふ (depu)」と 6 種類に区別していた発音を現在では、すべて[ジョー]と単純化して発音するようになったこと。

以上

### <補足 1> 上記 8.同音異義について

日本語の「カン」という発音は、朝鮮語では 16 種類の発音に分けられる。すなわち、次のように朝鮮語の 16 種類の発音\*が、日本語ではすべて同じ発音「カン」になる。

朝鮮語の語頭の子音(4 種類) × 語中の母音(2 種類) × 語末の子音(2 種類) = 16 種類

k(平音)	a	n
k'(激音)	wa	m
k''(濃音)		
h		

朝鮮語の例: kan(刊)、kam(感)、kwan(関)、han(韓)、ham(艦)、hwan(還)、

このことから日本語は同音異義のことばを生みやすく、朝鮮語ではそうではないことが分かる。

\*ただし、朝鮮語にこれら 16 種類各々の発音に相当することばがあるわけではない(すなわち単なる音の組合せであって意味のないものがある)。

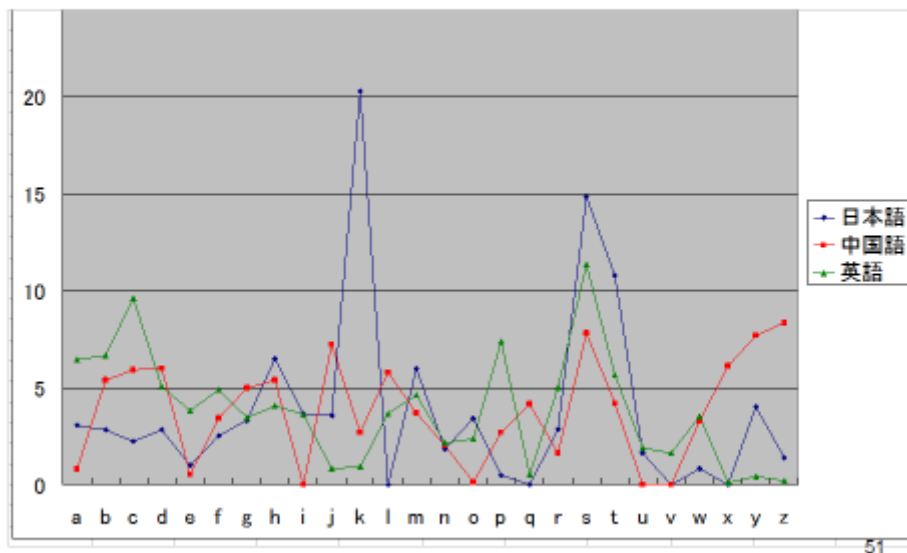
## ＜補足 2＞ 上記 9. (4) 1)に関連して

日本語、中国語及び英語について単語の語頭の文字の分布について調べた。具体的な方法としては、和英辞典\*、中日辞典\*\*及び英和辞典\*\*\*でアルファベットの a, b, c, ……z 各々で始まる単語が掲載されているページ数をカウントし、そのページ数が単語数とほぼ比例していると仮定して、各アルファベットで始まる単語が全単語に占める割合(%)を計算した。単語数の分布は、下記のグラフのようになる。

このグラフから日本語では、ローマ字表記で k で始まる単語が全単語数の 20%強を占めていることが推測できる。そのため日本語の団体名等をローマ字の頭文字で表記すると、たとえば「工作機械協会」の略号は KKK となり K が頻出することになる。中国語及び英語では、単語の分布は比較的滑らかである。この漢字名称の拼音表記は Gongzuo Jixie Xiehui で、頭文字は GJX であり、英語では Machine Tool Association で、頭文字は MTA となる。

## ＜参考＞単語の頭文字の分布(%)

注記：日本語はヘボン式ローマ字表記 中国語は拼音表記



\*研究社「新和英大辞典」(1965) 見出しはヘボン式ローマ字になっている。

\*\*三省堂「超級クラウン中日辞典」(2008)

\*\*\*小学館「英和中辞典」(1980)